

語りの「聴き方」からみた聴き手の関与

畑中千紘 京都大学こころの未来研究センター
Chihiro Hatanaka Kokoro Research Center, Kyoto University

要約

本研究では、「聴く」ことを通した聴き手の関与のあり方について、聴き手の「聴き方」と、語り手と聴き手の相互作用という2つの観点から検討した。語り手が2つの話を語り、それが「どんな話だったか」を聴き手に語り直させたとき、語り直されたテキストが基本テキストから変形を受けた程度と、その際に表れたパフォーマンスの揺れの程度を基準とし、3つの事例を選択して検討を行った。基本テキストからの変形が最も少なかった事例Aでは、言葉をそのまま尊重するという聴き手の基本的態度が示されたが、うっし返された言葉が二重性をもたない限り、語り手に動きをもたらしることが難しいことが示唆された。心理的混乱が最も高く示された事例Bでは、語りそのものよりも目の前の語り手に意識を向けるという関与の仕方が示された。想起の際の変形が最も顕著に示された事例Cは、今回の調査を通じて語り手が最も話を「聴いてもらった」と感じた事例であった。聴き手が語りに飛び込み、内側から語り直すという語りに対する深い関与が、元の語りを違うものにしてしまう危険性を越えて語り手を動かす力をもつことが示された。

キーワード

聴き手の関与、聴き方、語り、語りの揺れ、聴き手と語り手の相互作用

Title

The Commitment of Listeners to Stories from the Perspectives of the "Way of Listening"

Abstract

In this study, the commitment of listeners when listening to another's story was considered from two perspectives; the "way of listening" and the interaction between the speaker and the listener. In the research session, a speaker told two stories which were retold by the listener. Three cases were selected with differing degrees of transformation in the retold stories, and varying degrees of fluctuation in the retelling performance. Listener A, who transformed the stories the least when retelling them, kept and valued the original stories and showed a basic listening attitude. However, if the speaker finds no difference between the original story and the retold story, the listener's commitment cannot influence the speaker. Listener B, who showed the most fluctuations in retelling the stories, committed not to the story but to the speaker. Listener C, who transformed the stories the most when retelling them, was the "best listener" for the speaker in this investigation. She dived into a story and reproduced it from within. She substantially changed the original story, and in one sense destroyed it, but her deep commitment moved the speaker.

Key words

commitment of listener, way of listening, story-telling, fluctuation of telling, interaction between listener and speaker

問題と目的

1 はじめに——対話における「聴く」という関与

言葉を中心とした対話において、聴き手が語り手の言葉をどのように聴くかということは、語り手がどう語るかと同様に重要である。語ることが明示的であるのに比べ、聴くという行為は一見何もしていないように見えることさえあり、表面的にはとらえ難いものである。しかし、語ることと聴くことは光と影のように切り離すことのできない一つの現象の両側面であり、対話について考える際には語り手のあり方だけでなく、聴き手のあり方にも目を向ける必要があるだろう。

臨床心理面接の対話についても同様のことがいえる。クライアントは一般に語り手として捉えられることが多く、その人が何をどのように語るかに主な関心が向けられる。セラピストはクライアントの語り意識に向け、そこからその人を見立て、働きかけるのである。しかし一方で、クライアントを聴き手と見ることで浮かび上がってくるものもある。たとえば、何気ない言葉を被害的に受けとったり、比喩や冗談が通じなかったりする場合、それはクライアントの病理や特性を見立てるための大きな手がかりとなる。クライアントの特性は、その人の語りにも映し出されるとともに、聴き手としてのあり方にも色濃く反映されているのである。

一方、セラピストも聴き手としてクライアントに関与する。多くの場合、聴くことが直接クライアントの問題を解決するわけではないが、セラピストは語りを聴きつづけ、クライアントの変容のプロセスを共に歩もうとする。岡（2004）が“カウンセラーの聞く力は、聴覚的能力や、言語的能力のみならず、カウンセラー自身の存在の重さ”であると述べているように、セラピストの聴き方はセラピストの臨床的態度や存在感を示すものといえる。また、河合（1992）が、クライアントの語りにも“耳を傾けつつ、そこに物語を読みとろうとする努力をしなければならない”と述べているように、セラピストは受身的に話を聴くだけでなく、聴くことを通じて語りにも能動的に関与する。聴き手が積極的に関与することによって、単に話の聞き役になる

のとは異なり、語られたことの意味が深まり、展開していくことが可能になるのである。このように、セラピストがどのような聴き手であるかということも面接の展開に大きく影響しているといえる。

1対1の対話は心理臨床の中心といえるが、臨床心理面接において、クライアントとセラピストは互いに語り手となり、聴き手となりつつ対話を展開する。そして、クライアントとセラピストのどちらを聴き手と見るにせよ、聴くという関与を通じて両者は互いに影響を与えあっている。対話の場における聴き手のあり方に光を当てることで、語りにも目を向けているときは異なるものが見えてくるのではないだろうか。このような考えに基づき、本研究では対話において聴き手のあり方がどのように作用するのかについて検討する。すなわち、1対1の対話場面において「聴く」という関与が語り手にどのような影響を与えるのか、また、それが聴き手の聴き方の特性とどのように関連するのかについて調査事例をもとに検討する。これらを通じて、聴く関与が果たしうる役割や機能についても考察を深めたい。

2 言葉を変形する聴き手

「聴く」ことがもつ主要な働きのひとつに、語り手の言葉を〈受けとめる〉ことがある。しかし、「聴く」ことが、そのまま言葉を受けとめることを意味するわけではない。日常対話においても、難しい話でもないのに聴き手が話の一部を忘れていたり、思い違いをしてしまうことは珍しいことではない。このことに関して、パートレット（Bartlett, 1983/1932）の想起に関する研究は示唆的な観点を示している。この研究では、被験者に物語などの有意味刺激を記憶させ、なるべく正確に再生させるという実験が行われた。その結果、被験者は想起の際に“刺激の一部を強調したり、無視したり、付け加えたり”と、“自分が何をしているかを考えることもなしに、元のものを変形”（傍点筆者）しており、完全に正確な想起がなされることはほとんどなかった。この結果は、与えられた刺激を反復するというきわめてシンプルな再生課題においてさえ、人は鏡のようにフラットに言葉をうつし返すわけではないことを示唆している。これと同様、「聴く」こと

を考える上でも、聴き落としや聴き違いを単なる偶発的な失敗と見るのでは不十分であろう。聴き手が語り手の言葉を全くそのままに受けとめることなどほぼ不可能であり、「聴く」プロセスは、聴き違いや聴き落としなどの変形やズレを内包したものと考えられるのである。相手の語りを傾聴しようとする心理療法場面においてさえ、セラピストはほとんど無意識のうちに語り手の言葉から色々なものを受けとめ損ねていることが推察される。臨床面接の直後にセラピストが書いた面接記録と、その面接の録音記録を比較した研究において、セラピストが書いた記録には“書かれているものよりも見落とされているものの方がはるかに多く、非常に有意義なものも些細なものも見落とされやすい”ことが示されているのである (Rogers, 2001/1989)。ただし、聴くことに伴う変形は必ずしも否定的に作用するばかりではない。言葉は決して全てを表現できる媒体ではないが、それにもかかわらず我々は言葉によって、言葉で表しきれないことまでを伝え、共有することができる。こうしたことが可能なのは、森岡 (2002) が“ことばはそれを受け取る人がいてはじめて成立する行為”と述べるように、聴き手が言葉で語られたこと以上のものを受けとっているからこそであるといえよう。

このように、「聴く」プロセスで聴き手が行う変形は、語り手の意図とのネガティブなズレを生む一方で、言語表現の不完全性を超えて語りを〈受けとめる〉ことを可能にする生産的な側面をもつ。語り手の言葉がどのように受けとめられるかは、聴き手がそれをどのように変形させるかにかかっているとも言えるのである。本論では、この聴き手の行う変形を素材とし、そこに反映される聴き手のあり方について検討を行う。

3 方法の検討——言葉による反応の分析

直接にはとらえ難い聴き手のあり方を扱うにあたり、ここで方法論について検討しておきたい。認知科学や社会心理学の領域では、次のような方法で聴き手 (聞き手) に関する研究が行われてきた。すなわち、対話を一つの相互的なプロセスと捉え、そこから聴き手が示す観察可能なふるまいを抽出し、微視的な分析を重ねることで聴き手がどのように対話に参加しているか

を検討するものである。たとえばグッドウィンは聴き手の“参与態度の表出” (engagement displays) に着目し (Goodwin, 1981)、発話の時間的連鎖構造、視線や身体の動きなどの詳細な分析を行っている (Goodwin, 1980, 2009 など)。また、臨床場面の対話についても会話分析 (Madill & Barkham, 1997) やビデオ映像を用いたポーズや視線の解析 (Nagaoka & Komori, 2008, 長岡・小森, 2009) が行われてきた。これらは対話状況全体の中に聴き手を捉え、俯瞰的な視点からその特徴を分析する方法をとっているものといえる。

一方、臨床領域においては、対話参加者の主観的な視点に重点が置かれてきた。たとえばそれは、臨床事例研究がセラピストの作成した記録を素材とすることにも表れている。先にも述べたように、セラピストが作成する面接記録は決して完全なものではなく、聴き落としや忘却、思い違いによる歪みが多分に含まれたものである。しかし通常、事例研究では録音などの客観的手段によって実際の対話を確認するのではなく、セラピストの手によって作られた記録を一次資料として検討を行う。それは、臨床面接では参加者それぞれが録音や録画の記録のように取りこぼしなく対話の全てが体験されるわけではないことによっている。個人の主観的体験が重視される臨床領域においては、それぞれの参加者が体験する主観的で不完全な対話体験をこそ重視するのである。このような事情を鑑みれば、俯瞰的視点からのデータ分析は、状況全体を客観的にとらえるためにはふさわしいが、臨床的な見地からすれば参加者の内的な体験からは遠ざかってしまう危険性がある。臨床的立場から聴くことに接近しようとする際には、客観的に聴き手のあり方を分析する視点とともに、それが語り手にとってどのように体験されたかという主観的視点もまた大切であるといえよう。

このような方法論的立場は古典的にはユングとリックリン (Jung & Riklin, 1993/1904) の言語連想実験やロールシャッハの形態解釈実験 (Rorschach, 1976/1921) などにもみることができる。いずれも、言語連想検査、ロールシャッハ・テストとして現在でも広く用いられており、被検者に刺激を与えた際の言語反応の分析と、検査者の主観を含めた考察を組み合わせる方法をとっている。すなわち、通常は言葉にされることのない内的なプロセスを言語化させ、まず、言語反応

の形式や内容に反映される被検者のあり方を検討する。次に、そこで捨象された相互的なやりとりや検査者の主観的印象、被検者の生育歴などを考え併せながら総合的に事例を検討していくのである。言語反応を素材とするのは、そこに被検者が日常用いている“その人らしいリスポンス”（馬場，1995）が反映されると考えられているためである。これは、自然科学的なモデルに立脚しつつも、そこで捨象された要素を検査者の主観的体験を考察に入れ込むことで補完しながら被検者をホリスティックに捉えようとする態度を基盤にしたものである。

本論で扱おうとする聴き手の行う「変形」も、逐一観察可能な形で示されるものではなく、あくまで潜在的に無意識的に行われる部分が大きい。そこで、本研究では聴き手に語り手の話をどのように聴いたのかを語り直してもらい、潜在的な聴き手の構えを言語化させることで捉えやすくすることを試みる。具体的には、筆者が語り手となって2つの話を語り、聴き手（被調査者）にそれが「どんな話だったか」を語り直してもらおう。その際、聴き手によって語り直されたテキストには何らかの変形がなされると推察される。まず、その言葉の変形の仕方を基軸に、その人が聴き手としてどのように語りや語り手に関与しているのかについて検討を行う。次に、語り手が聴き手に対してもった印象を切り口として検討を加える。後者の視点を取り入れるのは、その聴き手の聴き方が語り手にとって内的にどのように体験されるのかという臨床的観点から考察を行うためである。このような視点を取り入れることによって、対話の相互的な側面を含めた考察を行うことができると思われる。ただし、語り直されたテキストは聴き手のあり方をあくまで間接的に表したものであり、聴き手の言語化能力や表出の程度に左右されるものであること、また、ここで扱うのはあくまで今回の語り手との相互作用であること、という本研究の方法的限界も認識しておかねばなるまい。

4 目的

これまで述べてきたように、本論では、対話において「聴く」という関与を通じて聴き手が行う関与のあり方について検討する。語りを「聴く」という状況は

一回性の高いものであり、当事者に固有の関係性と切り離して考えることができない。したがってここでは、得られたデータを事例検討の形でとりあげ、その事例に表れる聴き方がどのように語りを受けとめうるのか、あるいは受けとめ損なってしまうのかについて、それが孕む可能性と危険性の両面から検討を行う。このとき、同一の話を同一の語り手から語ることによって、それぞれの聴き手の違いをより鮮やかに描き出すことができると考えられる。この調査場面は、語り手と聴き手が入れ替わりながら展開する実際の対話のプロセスからすれば、ごく一部を切りとったものにすぎず、直ちに「聴く」こと一般に通ずるものとして敷衍することは避けなければならない。しかし、状況の性質と事例の個別性を自覚しながら考察を深化させていくことで、それぞれの「聴き方」が語りの場でどのように現象するのかについて、現場に即した臨床的視点から迫ることが可能になるとと思われる。以上のような観点に基づき、「聴く」という関与の中で聴き手がどのように語りを受けとめるのかについて、**聴き手が話を語り直す際の言葉の変形のあり方**、およびそれが語り手に**どう体験されるのか**という2つの視点から描き出すことを本研究の目的とする。

方 法

調査対象

さまざまな学部、研究科から筆者と面識のない大学生および大学院生40名（男女各20名）が集められた。年齢の平均は20.2歳（S.D.=2.1）であった。

語り素材の作成

語りの素材として、2つのテキストを筆者が独自に作成した。作成に当たって、筆者が個人的体験として語って不自然でないこと、筋が複雑すぎず、1つのエピソードとして適度な長さであることなどを重視した。以下、基本テキスト①、②とする。ニュートラルな内容のもの（基本テキスト①）と聴き手の感情を刺激すると思われるもの（基本テキスト②）の2種類を作成し、意味の単位ごとにユニットにわけた（表1、2）。

表1 基本テキスト①
(ユニットの区切りを／で示した)

小学校三年生の頃、/
その子の進度に合わせて一人一人勉強するような塾のようなところに通うことになりました。/
スーパーの屋上に教室があって/
いつも買い物に行くときに入る入り口の横にある階段をのぼっていくのですが/
普段は行けなかったところなので/
ちょっと特別な感じがして/
それがうれしかった覚えがあります。/
その塾で、私は目の大きなちょっと印象的なお姉さんに会いました。/
その教室では席は自由なのですが、/
あるとき、隣の席にそのお姉さんが座って勉強していて、/
じっと私の方を見ているような気がしたんです。/
そのお姉さんはそれから教室で会うと必ずこちらをにらんでいるような気がしました。/
通い始めたばかりだったので、/
私は自分の学年よりもずいぶん遅いところから始まっていて/
それに対してお姉さんは長くやっているのか、/
年上ということもあったのか/
私よりも大分進んだところを勉強していました。/
そういうこともあり、私はだんだんそのお姉さんに敵意のようなものを抱いていました。/
そして、会おうとお姉さんが“きっ”とにらんでくるので/
こちらを負けじとにらみ返す、というようなことが何回か続きました。/
ある秋の晴れた日、/
いつものように塾に行くとき、その日はお姉さんが先に来ていて/
お姉さんが消しゴムを私の方にくっつき落としました。/
拾って渡してあげると/
お姉さんはにっこり笑って/
ありがとうと言ってくれました。/
そして、ずっと何かを私の机に置いていきました。/
それは雑誌の付録の便箋に書いた手紙でしたが、/
そこにはずっと私と友達になりたかったのだと書いてありました。/
それからその子と初めての交換日記をすることになりました。/
交換日記がいつまで続いたのかは覚えていませんが、/
高校くらいまでは電車で会うと話したりしていました。/
今は全然連絡をとっていないので/
モデルになりたいと言っていた彼女が/
どうしているのかなと思っています。

その際、呂本（1992）がテキスト比較に用いている“アイディアユニット”の認定基準を参照し、次のような基準に基づいてユニットを認定した。(a) 基本的に単文を1つのユニットとする。したがって重文は2つのユニットとする。複文は従属節が時間的關係を表す場合は2ユニット、それ以外は1つのユニットとする。

(b) ～と思う、～を知るといったような埋め込み文は、埋め込まれている部分を単独のユニットとはせず、

それを含む全体を1つのユニットとする。(c) 文章中に複数回言及されるものに関しては独立したユニットとして換算しない。これは、話を整合的にするための説明的な語句は、語りの変形という視点から見てカウントすべきものではないと考えられるためである。

手続き

X年10月～11月にかけて、個室にて1対1の対面法で

表2 基本テキスト②
(ユニットの区切りを/で示した)

うちの祖父と祖母は年が10ほど離れていました。/
 祖父は、大正生まれらしく/
 男がそんなことできるかという感じで/
 家の中のことなど、ほとんどやらなかったし、できませんでした。/
 今から3年ほど前に/
 病気で祖母が亡くなりました。/
 自分の方がずいぶん年上だったので/
 まさか祖母が先に亡くなると思っていたし/
 祖父も周りも大変なショックを受けました。/
 それから祖父は一人で暮らしていましたが、/
 精神的にも追い詰められてきたのか/
 周りの人を疑うようなことを言ったり/
 早く死にたいと言ったりするような日々が続きました。/
 祖父がそんな風なので、会いに行っても私も何となくいい気持ちでせず/
 自然に足が遠のいてしまったのですが/
 今年の春/
 祖父が突然入院しました。/
 元々、酸素ポンペを常に抱えていないといけないような持病があったので/
 私もそれほど驚きませんでした。/
 それから弱っていくのはものすごく早かったです。/
 身体は、人間はこんなになれるのかというくらい小さくなってしまいました。/
 その頃は、携帯がなるたびにドキドキするような日々でした。/
 そんなある日、母から今日は何をしているの?というメールが入りました。/
 私は何となくいつもと違う雰囲気を感じ、/
 電話してみると/
 珍しく母が、病院に来てというようなことを言うので/
 タクシーで病院に行きました。/
 最近の病院では家族が揃うのを待っていてくれるらしく/
 私が着くと、伯父が看護師さんに揃いましたと報告にいきました。/
 そして、看護師さんが酸素を送るポンペのスイッチを切りました。/
 そこからは自然に心臓が止まるのを待つのです。/
 それがどのくらいの時間がかかるのかわからなくて/
 徹夜の覚悟をしながら待っていました。/
 でも、そのときは案外早くやってきて/
 本当にドラマみたいで心電図がぴつとまっすぐの線になりました。/
 その瞬間は本当にしーんとしていて、/
 何とも言えなかったのですが/
 そのとき、ああ、今だったんだと思いました。

調査を行った。

〈語り場面〉 まず、筆者が語り手となり、基本テキストを①、②の順で語り、被調査者が聴き手となってそれを聴いた。(以下、本稿では調査者、被調査者をそれぞれ「語り手」、「聴き手」と記す。) 語る際には、どの聴き手に対してもなるべく同じ調子で、し

かし自然な雰囲気となるように心がけた。教示は以下の通りである。「これから私(語り手)の話をお聴きください。〇〇さんは、普通に聴いていただければ結構です。これは私自身の話です。話は2つあります。」

〈語り直し場面〉 次に、聴き手に先の語り手の

話がどのような話だったかを①、②の順で語り直してもらった。教示は以下の通りである。「今、私がした話はどんな話だったかについて話していただきたいと思います。これは記憶力のテストではありませんので、気楽な気持ちで、先ほどの私の話がどんな話だったかをお話してください。」また、語り直しの際、語り手について言及するときには、名前前で呼ぶように教示した。

語り直しの際には、語り手から積極的に言葉を挟むようなことはせず、相づちをうつなど、聴き手が自然に話せるよう配慮しながら応答を行った。

〈振り返り場面〉 語り直しが終了したら、2つの話に対する感想や、話を語り直すときに感じたことなどについて尋ねた。

これらの手続きを、なるべく自然な対話の場となるよう配慮しながら行った。また、全ての手続きを、聴き手の了承を得てMDに録音した。続いてロールシャッハ・テストを施行したが、本稿の論旨に沿わないため、ここでは検討を行わない。なお、聴き手が対話場面に集中しやすくするため、ロールシャッハ・テストを行うことについて、事前には告知を行わなかった。

結果

1 分析対象について

今回の調査の結果においても、基本テキストを全てそのままに語り直した聴き手はみられなかった。すなわち、あらゆる聴き手の語り直しには、基本テキストからの何らかの抜け落ちがみられたわけである。語り直しの際に抜け落ちた部分や量は、その人の「聴き方」に迫る上で重要な要素ではあるが、語られないものを扱うことには困難が伴う。本研究では、実際に聴き手によって語り直されたテキストを素材とし、そこに反映された「聴き方」について考察を行う。(以下、各聴き手によって語り直されたテキストを語り直しテキストと呼ぶ。)

2 結果の整理

(1) 語り直しテキストのユニット分け

まず、各聴き手の語り直しテキストを、基本テキストに準拠しながらユニットに分けた。2つのテキストを比較するため、ユニット分けは基本テキストに準ずる形で行われたが、基本テキストにはなかったことが語られていたり、抜け落ちがみられたりするため、2つのテキストのユニット数は異なっている。基本テキストにない部分については、基本テキストと同様の基準に従いユニット分けを行った。

(2) 【再生】 - 【変形】の分類

次に、(1)で分類した語り直しテキストのユニットが、基本テキストのものから変形を受けているかどうかを基準に比較を行った。その結果、全てのユニットは、言葉の形式・内容的側面から1. 基本テキストから変形を受けず、概ねそのまま再生されたユニット、2. 聴き手によって変形が加えられていたり、新たに創出されたユニットのいずれかに分類された。前者を【再生】ユニット、後者を【変形】ユニットと呼ぶ。それぞれの下位分類と具体例を表3に示す。

(3) 〈揺らぎ指標〉

これに加え、笑い、沈黙、言いよどみ、言い直し、主語や語尾の省略および、聴き手のコメントや思いが述べられる部分など、聴き手が流暢に語り直すことを疎外している要素にも着目した。これらには、単独では明確な意味をもたないものや、単なる繰り返しとカウントされてしまうものなどが含まれており、(2)のような言葉の意味内容を基準とした分類からはこぼれ落ちてしまうものである。しかし、森岡(2002)が指摘しているように、言語は“描写、再現”のみならず、“パフォーマンス”の働きをもつものである。上記の要素は、言語的文脈の中で大きな意味をもたないという点では聴き手がどのように話を聴いていたのかを直接示すものではないが、どのようなリズムや語り口で語り直したかという形で、聴き手のあり方を示している。逐語的に書き起こした言語データには、聴き手の示した非言語的ふるまいが全て表れてくるわけではな

表3 【再生】ユニットおよび【変形】ユニットの下位分類とその定義

	下位分類	定義	具体例
【再生】	そのまま	文字通り再生されているもの。多少の語尾の言い換えなどは問わない。	
	言い換え	聴き手の言葉に言い換えられているが、意味の変化がほとんどないもの	「酸素ポンペ」→「酸素の機械」
	簡略化	新たな情報は加えずに、簡略化されているもの	「小学校三年生」→「小学校の頃」
	抽象化再生	基本テキストでは具体的だったことが、内容を変えずに抽象化されるもの	「疑うようなことを言ったり」→「疑うような感じで」
【変形】	論理的統合	基本テキストに含まれた別々の情報から論理的に類推し、新たな情報として述べているもの	「祖父と祖母は10歳ぐらい年が離れていた」、 「祖父は自分の方が年が上だったこともあり」→ 「祖父は祖母よりも10歳年上」
	抽象化・一般化	基本テキストより抽象的なレベルから述べることで情報量が著しく減少するもの	基本テキスト②の後半部分を「おじいさんの最期を見送った」の一文でまとめてしまう
	つながりの変換	因果関係の創出、修飾語の移動	「お姉さんはモデルになりたいと言っていたんですけど、今はどうしてるのかなあと思っているんです」→ 「モデルになりたいと言っていたので今気になっている」
	主観付加	聴き手の主観的な印象や感情が付加されるもの	「10歳ぐらい離れてて」→「10歳ぐらいですごい離れてた」 「目が大きい」→「目がぱっちり」
	その他の変形	上記4つのカテゴリどれにもあてはまらないような、基本テキストには全くなかった要素が加わっているもの	「(お姉さんと主人公が) すごく気が合ってる」と元の語りにはなかった情報を述べる

いが、上記の要素は聴き手の示したパフォーマンスの特徴のひとつの表れと捉えられるのである。このような考えから、流暢な語り直しを妨げ、語り直しに揺らぎを生じさせるものを〈揺らぎ指標〉と名づけ、それが含まれるユニットに「+」とコードした。表4に下位分類とその定義を示す。

(4) 客観性保持について

分類の客観性を高めるため、(2)～(3)の手続きについて、5名分の語り直しテキスト(279ユニット)を臨床心理学専攻の大学院生1名と筆者が独立にコードし、合議の上、一部カテゴリーを修正した。結果、一致率は88.2%となり、概ね一致したと判断し、残りは筆者が単独で分類とコード化を行った。全体を通して言語的・形式的側面を基準とすることで、客観性を

維持するよう努めた。

(5) 聴き手ごとの数値の算出

各聴き手の特性をみるため、各聴き手が語り直しテキスト①、②を通して示した、【再生】と【変形】の割合および、〈揺らぎ指標〉がコードされたユニットの割合を算出した。これを表5に示す。

考 察

1 基本テキストの性質について

事例の検討に先立ち、本研究で用いた基本テキスト

表4 〈揺らぎ指標〉の下位分類と定義

	下位分類	定義
(揺らぎ指標)	笑い	録音で聞き取れる程度の笑い
	沈黙	その人の間のとり方に比して間があいている箇所
	言いよどみ	どもりや焦り, 迷いの表出
	言い直し	言いかけてからそれを取り消して別の内容を言い直すもの
	語尾の省略	何かを言いかけるが, その続きの言葉がなくなるもの
	主語省略	主語が入るはずの部分が省略されていて, 文章がちぐはぐになる, あるいは, 成り立たなくなるようなもの
	戸惑いの明示	語り手に向けられた疑問や謝罪の言葉など
	疑問符	自問的な言葉, あるいは語尾をあげて断定を避けようとするもの

のもつ性質について、聴き手の感想を手がかりに整理しておきたい。基本テキスト①では「うーん、いいなあって(笑)(M12)」、「ドラマに出てきそうない話だなんて思った(F14)」など好感触を示した聴き手や、「ふう～ん、そうなんやあ～っていうくらい(M15)」、「女の人の世界は難しいのかなあ(M8)」など中立的な感想を述べる聴き手がほとんどであった。基本テキスト①は、聴き手が語りとの距離をコントロールしながら聴くことのできる話であると考えられる。

一方、基本テキスト②は近親者の死が主題となっており、「うちのじいちゃんみたいだ～(M6)」、「自分の祖父がそうなったみたいだ…(F18)」など、自らの経験を思い出す聴き手や、自分の経験との境界が曖昧になる聴き手がみられた。また、「おじいさんがうす～くなっていく感じで結末を覚えてなかった(M14)」と、話をうまく思い出せなかったり、「くり返すことが、ちょっと、ねえ(笑)(M3)」など、語り直すことに抵抗を感じる聴き手もみられた。②では、①に比べて聴き手の感情や抵抗感、忘却などが多く表れており、これは聴き手が意識的にコントロールできないレベルで動かされる性質をもった話であると考えられる。

2 事例の抽出

次に、どの事例をとりあげるかについて検討する。まず、語り直しテキストが基本テキストからどの程度【変形】を受けているかに着目したい。【変形】の割

合が低い聴き手は、語られた言葉に忠実な聴き手といえるであろうし、【変形】の割合が高ければ、少なくとも表面上は忠実な聴き手とはいえないだろう。語り直しテキストにみられる【変形】の程度は、聴き手が語りを文字通りの意味で正しく受けとめているかを示しており、「聴き方」を検討する上で鍵になる視点と思われる。

2つ目の基準として〈揺らぎ指標〉を用いる。これは、笑い、沈黙、言いよどみ、言い直しなどに対してコードされたものであり、語り直す際にみられたパフォーマンスの揺れの程度を示している。特に臨床領域では、こうした反応の揺らぎや乱れは無意識的な心の動きとの関連が指摘されてきた。たとえば、言いよどみ、言い直しなどは、フロイト(Freud, 1970/1901)が失錯行為として、また、語尾や主語の省略、沈黙などはユングの言語連想実験(Jung, 1993/1907)で反応を妨害するものとしてとりあげられ、意識の活動を妨げる要素として考察されてきた。これらは聴き手が録音機器のように機械的に言葉を取り入れ、再生するのであれば出てくることがない要素であり、聴き手の内面の動きや関与を示すものとして着目することができよう。

以上のような考えから、語り直しテキストに表れた【変形】の程度と、〈揺らぎ指標〉を基準とし、表5のデータを基に事例の選択を行う。ここでは聴き手の特性を探索的に検討するため、明瞭な特徴が表れていると想定される3つの事例をとりあげたい。まず、語り直しテキストに表れた【変形】の割合が最も低い事例

表5 〈揺らぎ指標〉, 【再生】, 【変形】に分類された語り直しテキストユニットの数および比率
*…事例A, **…事例B, ***…事例C

聴き手	語り直しテキスト①のユニット数				語り直しテキスト②のユニット数				総ユニット数に対する割合 (%)		
	〈揺らぎ指標〉	【再生】	【変形】	計	〈揺らぎ指標〉	【再生】	【変形】	計	〈揺らぎ指標〉	【再生】	【変形】
M1	8	18	10	28	5	12	17	29	22.8	52.6	47.4
M2	8	16	6	22	8	16	13	29	31.4	62.7	37.3
M3	3	7	7	14	6	4	6	10	37.5	45.8	54.2
M4	9	15	10	25	14	16	8	24	46.9	63.3	36.7
M5	5	17	4	21	7	16	11	27	25.0	68.8	31.3
M6	10	11	11	22	11	13	10	23	46.7	53.3	46.7
M7	10	10	11	21	4	11	5	16	37.8	56.8	43.2
M8	8	18	8	26	4	9	18	27	22.6	50.9	49.1
M9	7	13	5	18	15	13	11	24	52.4	61.9	38.1
M10	4	24	6	30	14	23	12	35	27.7	72.3	27.7
M11	12	27	4	31	8	17	15	32	31.7	69.8	30.2
M12	9	12	5	17	14	5	20	25	54.8	40.5	59.5
M13	0	13	6	19	11	13	11	24	25.6	60.5	39.5
M14	11	13	4	17	15	12	15	27	59.1	56.8	43.2
M15	14	10	19	29	20	17	21	38	50.7	40.3	59.7
M16	9	8	13	21	7	12	12	24	35.6	44.4	55.6
M17	11	12	9	21	10	9	10	19	52.5	52.5	47.5
M18	8	14	13	27	12	7	21	28	36.4	38.2	61.8
M19**	12	7	9	16	14	5	17	22	68.4	31.6	68.4
M20	2	17	9	26	9	19	18	37	17.5	57.1	42.9
F1	15	25	7	32	16	21	13	34	47.0	69.7	30.3
F2	6	21	3	24	13	20	9	29	35.8	77.4	22.6
F3	6	21	5	26	14	13	14	27	37.7	64.2	35.8
F4	4	12	7	19	4	18	12	30	16.3	61.2	38.8
F5	6	18	9	27	10	20	16	36	25.4	60.3	39.7
F6	5	23	8	31	3	22	6	28	13.6	76.3	23.7
F7	7	15	5	20	16	11	13	24	52.3	59.1	40.9
F8	8	21	5	26	11	19	14	33	32.2	67.8	32.2
F9	5	25	5	30	6	18	18	36	16.7	65.2	34.8
F10	8	15	7	22	8	12	8	20	38.1	64.3	35.7
F11	4	15	12	27	9	7	11	18	28.9	48.9	51.1
F12	8	16	3	19	13	15	15	30	42.9	63.3	36.7
F13	3	21	6	27	12	18	11	29	26.8	69.6	30.4
F14	3	6	5	11	2	8	9	17	17.9	50.0	50.0
F15	6	19	6	25	13	19	9	28	35.8	71.7	28.3
F16	0	9	4	13	8	12	5	17	26.7	70.0	30.0
F17	12	22	7	29	5	13	23	36	26.2	53.8	46.2
F18	4	20	7	27	11	25	5	30	26.3	78.9	21.1
F19***	15	12	36	48	9	16	31	47	25.3	29.5	70.5
F20*	2	15	2	17	5	16	4	20	18.4	83.7	16.2
平均	7.2	15.8	8.0	23.8	9.9	14.3	12.9	27.3	34.3	59.1	40.9
SD	3.9	5.4	5.6	6.6	4.3	5.2	5.6	7.2	13.4	12.8	12.8
中央値	7.5	15.5	7	24.5	10	14	12	27.5	32.0	60.8	39.2
MAX	15	27	36	48	20	25	31	47	68.4	83.7	70.5
MIN	0	6	2	11	2	4	4	10	13.6	29.5	16.2

(F20)をAとする。Aは〈揺らぎ指標〉も低く、語り直しによる変化が最も少なかった聴き手といえる。次に、〈揺らぎ指標〉が最も高い事例としてB (M19)をとりあげる。最後に、語り直しテキストに表れた【変形】の割合が最も高い事例としてC (F19)をとりあげる。次節では、このように選ばれた3人の聴き手の語り直しにみられる特徴を記述し、それぞれの聴き手

がどのように語りを〈受けとめ〉ているかについて、ポジティブな側面とネガティブな側面の両面から考察する。始めに聴き手の「聴き方」の検討を行い、次に語り手としての筆者の印象を含めた考察を加える。これら3事例の語り直しテキストを表6~11に示す。

3 事例検討

(1) 事例A——言葉をなぞる聴き手

a) 聴き手Aの「聴き方」について 聴き手Aは20歳の女性である。語り直しの際の【変形】が最も少なく、〈揺らぎ指標〉も低かったことから、総じて余計な情報を付け加えず、基本テキストを忠実に再現した聴き手といえる。Aの語り口は落ち着いていて感じがよく、言葉に詰まることもなく終始なめらかに語り直しがなされた。Aが語り直した量は少なめで、基本テキストの情報が網羅されているとはいえないが、全体に基本テキストからのズレはほとんどみられなかった。A自身が感想として「間違ったことは言わないようにした。いきなり尾ひれがついてたらいやじゃないですか。」と述べているように、Aの「聴き方」は言葉を正しく返すことに焦点が当てられているようである。先に、「聴く」ことは鏡のようにフラットに刺激をうつし返すことではないと述べたが、Aは、自分が鏡うつしにできる部分だけを慎重に選ぶとすることで、忠実に基本テキストの言葉をなぞっていったと思われる。

このような「聴き方」は、どのような働きをもちうるであろうか。言葉には微妙なおもむきや意味合いが込められているものであるが、言葉をそのままうつし返すことは、その微妙なニュアンスを含めて言葉をまるごと大切にしようとする態度の表れといえる。言葉をそのまま大切にすることは、それを発した語り手の存在をありのままに尊重することにもつながる。語り手に先んずることなく、あくまで聴き手に忠実に添おうとする態度は、他者の語りを聴く上での基本といえるものであろう。森岡（2005）は、臨床場面でセラピストがクライアントの語りをなぞることによって、「他者の視点をいったん経由するという契機」が生まれ、“自己の二重化”が起こると述べている。言葉をなぞることによって、語り手の言葉はAという鏡を経由してその場にうつし出される。ここに二重化が生じ、語り手は、語ったときは異なる角度で自らの言葉に再び出会い、それと新たな関係をもつことが可能になる。このような意味で、Aの「聴き方」は、言葉を鏡

うつしにすることによって、語り手が自らの語りとならぬ新たな関係を結び直す契機を開いているといえるのではないだろうか。

b) 語り手の体験からの考察 次に、聴き手Aに対する語り手の印象を含めた考察を行う。語り手は、Aが言葉を淡々となぞるのに対し、非常に注意深く言葉を聴きとってくれたという感じを受けたが、Aの語り直しはあまり印象に残らないものであった。先に述べたように、言葉をなぞる「聴き方」が語り手に語りに向かい合う機会を提供するものだとすれば、なぜ今回はそのような動きが生じなかったのであろうか。

Aは基本テキストをそのままなぞるようにくり返したが、これは、語り手にとって自らの言葉をオウム返しにされたような体験であった。オウム返しが自閉症のコミュニケーション障害のひとつにあげられているように、うつし返しが機械的である場合、それはコミュニケーションとは体験されにくい。二重化が起こるためには、元の言葉とうつし返された言葉との間に何らかの差異があることが必要である。両者の間に差異が認められなければ、それは単なる複製にすぎず、「二」つの重なりにはなりえない。反復の中で差異が生み出されるからこそ、語り手は語られたものを聴き手の視点を經由したものとして体験し、二重化した自己と関係を結ぶことができるのである。もちろんAの語り直しは基本テキストと全く同じではないが、Aが正確さを重視し、鏡の役割に徹した「聴き方」をしたために、Aの語り直しはオウム返しされた言葉のように、複製された音として語り手に体験された。この意味で、Aの語り直しはいわゆる“繰り返し言葉の段階”（Wing, 1998/1996）にとどまっており、語り手の反応や動きが生じなかったのだと考えられる。

言葉をなぞり、うつし出すというAの「聴き方」には、相手の言葉をそのまま尊重するという、聴く者としての基本的な姿勢が体現されている。言葉をそのままうつし出すことは、語り手に対して、自らの言葉と向き合う可能性を提供する可能性をもつ。しかし、うつし出された言葉が何らかの他者性をもつものとして語り手に体験されない限り、それは可能態にとどまったままである。うつし返しがオウム返しのような複製と体験される限り、「聴く」ことは受けたものを反射

表6 事例A 語り直しテキスト①

	【再生】 / 【変形】	〈揺らぎ指標〉
と、畑中さんが、小学校三年生の時に、	【再生】	
えっとー、デパートの屋上にある、	【変形】	
進度に合わせて勉強するような、塾に通うことになって、	【再生】	
そこで、目の大きな印象的なお姉さんに、出会ったんですけど、	【再生】	
その人が、ときどきにらんでくるようにじっと見るので、	【再生】	
だんだん畑中さんも敵意を感じるようになって、	【再生】	
にらみかえしたり、とかしてて、	【再生】	
でもある日	【再生】	
おねえさんが消しゴムを落として、	【再生】	
それを拾ってあげると、	【再生】	
にっこりほほえんで	【再生】	
ありがとう、って行って、	【再生】	
でそのときに手紙を置いて、いきました。	【再生】	
そこにはずっと友達になりたい、と思っていた、と書いてあって、	【再生】	
で、交換日記が始まっ…て、	【再生】	+
高校、ぐらいまでは、	【再生】	
電車とかであつたら、話すような友達になった(笑)、ていうような話だったと思います。	【変形】	+
計…【変形】2ユニット 【再生】15ユニット 〈揺らぎ指標〉2ユニット		

表7 事例A 語り直しテキスト②

	【再生】 / 【変形】	〈揺らぎ指標〉
二つ目は、おじいさんとおばあさんの話で、おじいさんが、あまり家事とかをしたがらない人、だったんですけど、	【再生】	
3年前に	【再生】	
おばあさんが亡くなってから	【再生】	
すごくショックを受けて、	【再生】	
でだんだん、精神的にも追いつめられて行って、	【再生】	
あんまり会いに行っても、楽しくないような感じになったので、	【再生】	
次第に足が遠のいていったんだけど、	【再生】	+
…と、一年ぐらい？一年半？	【変形】	+
ぐらいに突然入院して、	【再生】	
それから弱っていくのが早くてー、	【再生】	
ある日電話が、あ、メールーが入ってきて、	【再生】	+
で、気になって電話をしたら	【変形】	
病院に来て、とお母さんに言われて、	【再生】	
で、行ってみたら、	【再生】	
それで家族が全員揃って、	【変形】	
それで酸素吸入器、が切られて	【再生】	
それから、心臓が止まるのをみんなで、待って、たんだけど、	【再生】	
それは意外と早くて、	【再生】	
ドラマのように心電図が横になり、	【再生】	
すつと、なくなって、いったと(笑)、いうような話だったと思います。	【変形】	+
計…【変形】4ユニット 【再生】16ユニット 〈揺らぎ指標〉4ユニット		

するだけの受身的行為におさまリ、語り手に新たな動きや変容を生じさせることは難しいのではないだろうか。

(2) 事例B——自身が揺れる聴き手

a) 聴き手Bの「聴き方」について 聴き手Bは20歳の男性である。〈揺らぎ指標〉の平均が34%であるのに対し、Bは68%と突出しており、語り直しの際

に最も顕著に揺らぎを示した聴き手といえる。全体に【変形】の割合も高く、①の話に比べて②に【変形】が多くみられることも特徴的である。全体として明るく軽い語り口であったが、愛想笑いが多く、話しくそんな様子もみられた。先に述べたように（揺らぎ指標）は無意識レベルの心の動きと関連している。感情に働きかける力の強い②の話に【変形】がより多く表れていることから、Bの軽快な語り口の背後に何らかの無意識的な心の揺らぎがあったことが推察される。Bは調査終了後の感想に、語り直し場面で「(Bは)ちゃんと聴いてくれてたのかって(語り手が)思ったんじゃないか」と述べている。また、①の冒頭で「小学…三年でしたっけ?」、②では「酸素ボンベ…ですか?」「とめますっていう話をされたんですね?」「亡くなるのを見届けるっていう…ことですか?」などと、数回にわたって語り手に確認を求めるような言葉を挟んでいる。これらの言葉からは、Bが、自分の語りの〈受けとめ〉方に不安を感じ、語り直しの際には自分の語り直しを聴いている目の前の語り手に強く意識を向けていたことがうかがえる。

下坂(1994)は、精神療法で患者の“言い分を聴いて、それらの要点を繰り返す、こういうことでしょうかと念を押す”“言語的確認”が力をもつと述べている。確かに、語り手の承認を得ながら対話を進めることによって、聴き手が独りよがりな思い込むことを避けることができる。言葉による確認が意識的に用いられるとき、それは忠実に語りを受けとめようとする聴き手側の努力である。一方、Bの言葉も表面上はこれに近い形式をとっているのだが、その表れ方からはBの意識的な努力とは考えにくい。たとえば①の末尾では「(笑)なんていうんすかね、交際じゃないし(笑)なんていうんすかね。まあ、まあ仲良く…すごして、まあ、今はなんすか、音信不通なんすけど、わかんないすけど、まあ仲良くしていた話なんすけど。」と話の締めで苦心している様子うかがえる。また、基本テキスト①の「スーパー」は、語り直し場面で「デパート」に変形されているが、それについてBは「ていうのをきいた時点ですげえって思ったんですけど(笑)」と自らの感想を付け加えている。こうした言葉の端々からは、語りを〈受けとめ〉損ねたことをどこかで感じ、確認や感想を何度も挟むことでそ

れをカバーしようとするBの姿が垣間見える。聴き手が語り全体をどう捉えたかが端的に表れる話の縮めの部分においても、Bは笑ったり「わかんない」と言ったりしながらなんとか自分の受けとめ方を表明するのを避けているようなのである。

b) 語り手の体験からの考察 語り手にとってBは、語りに対する誤解はあるものの、語り手を気づかってくれていることが印象に残る聴き手であった。特に②の話語り直しという話しくい状況であっても、笑ったり語り手に問いかけたりしながら、何とか場の雰囲気明るく保とうとするBの姿が印象的に感じられたのである。

先に述べたように、Bが身に受けたものは語りそのものというより心的な揺らぎであった。語りは正しく受けとめられず、変形を受けて再生されたが、そのことよりむしろ、B自身が揺らぎ、動くことによって、語り手には事例Aでは見えてこなかった「他者」としての聴き手の存在感をBに感じていたと思われる。また、Bが調査後に語り手のことを気にしていたことに示されているように、Bの関与は語りそのものに対してではなく、目の前にいる語り手に向けられていた。語りは聴き手に差し向けられたまま宙に浮き、代わりに言葉の揺らぎを通してBが受けた衝撃の痕跡が語り手に返ってきたのである。そのため、語り手の意識もまた、それ以上元の語りに向けられることがなく、聴き手Bの気づかいの方が印象に残ったのであろう。ここでは語りが二者関係をつなぐための手段や通路として機能していたと考えられる。このような「聴き方」のもとでは語りそのものが深まっていくことは期待しにくいであろうが、語り手と聴き手の関係を動かす可能性はあるだろう。この意味で、Bの「聴き方」は、語りの深まりがクライアントの変容につながると想定される心理臨床的対話というよりもむしろ、関係の構築や場の共有が優先される日常対話に近いものといえるのではないだろうか。

このような意味で、Bは語りを〈受けとめ〉るというより、B自身が無意識的に揺らぎを受けるという「聴き方」を示した。受けとめきれなかった語りは多くの【変形】を伴って語り直されるとともに、たびたびの言語的確認によって、Bに引き受けられることな

表8 事例B 語り直しテキスト①

	【再生】 / 【変形】	〈揺らぎ指標〉
ええと、一つ目のお話は、畑中さんが小学…三年、でしたっけ？の頃から	【再生】	+
塾に、ある塾に通い始めて	【再生】	+
まあ、それは(笑)、デパートの屋上であって、(笑)	【変形】	+
まあ、ていうのを聞いた時点ですげえって思ったんですけど(笑)		+
そこは進度、ごとにやっていくっていうスタイルの塾だったらいいんですけど、	【変形】	
ええ、その塾に、ある年上のお姉さんがいて、	【再生】	
で、そのお姉さんはまあ何かにつけてっていうんですかね。畑中さんのことを、まあ見てきたりいらんできた	【変形】	+
っていうふうにして、次第に畑中さんもなんかいやな感じ(笑)というか、なんと言え		
ばいいんですか。を抱いていくようになってしまったんですね。	【変形】	+
うん、でもそうやっていくうちに、お姉さんが、消しゴムを落として、	【再生】	
で、畑中さんが拾ってあげてっていうのがあって(笑)	【再生】	+
でその日に、そのお姉さんが畑中さんに、その、もらって、読んだら、	【再生】	+
まあずっと仲良くしようと、したいと思ってたっていう内容が書かれてて、	【変形】	+
そっから、(笑)お二人は、はい、交換日記とか、始まって	【再生】	+
で、それからずっと、結構長い間、	【変形】	
(笑)なんていうんですかね、交際じゃないし(笑)なんていうんですかね。まあ、まあ仲良く…すごして	【変形】	+
まあ、今はなんすか音信不通なんすけど。	【変形】	+
わかんないすけど、まあ仲良くしていた話なんすけど。	【変形】	+

計…【変形】9ユニット 【再生】7ユニット 〈揺らぎ指標〉13ユニット

表9 事例B 語り直しテキスト②

	【再生】 / 【変形】	〈揺らぎ指標〉
二つ目のお話は、畑中さんに、ええ、おじいさんとおばさんがお互いに10歳離れている。	【変形】	
…ええ…でそのおじいさんはすごい昔風の人で、	【変形】	+
(笑)家事をやらない	【再生】	+
(笑)男は、外で仕事？で、家を守るのは妻っていう考えをもっていた。	【変形】	+
で、10歳離れてたんですけど、先にその方、祖母…おばあさんの方が亡くなられてしま		
って	【再生】	+
で、おじいさんの方は、…まあ、その(笑)、その頃から、なんか周りに辛くあたったりとか、	【変形】	+
ふさぎこんだりして、しまっ	【変形】	
で、畑中さんも次第に、その、行っても…あんまりいい気分にはならなくて(笑)	【変形】	+
ま、あまり行かなくなると、足が遠のいてしまったんですけど、	【再生】	+
でもある日突然、	【変形】	
おじいさんが入院してしまうっていう知らせが来て、	【変形】	
でもそのおじいさんはそもそも酸素ボンベ…ですか？をもっていないと苦しい、その生活をしないといけない方だったんで	【変形】	+
そのおじいさんがある日入院したっていう知らせが来て、	【変形】	+
容態はそんなに、(笑)まあよろしくないっていう話で、	【変形】	+
それからまあ、まあ…訃報が…うん、に対して、ちょっとびくびくするような生活を送ってたんですけど、	【変形】	+
ある日、畑中さんのお母さんからいつもと違う感じで連絡が来たので、	【変形】	
畑中さんはそのままタクシーで病院に行かれて	【変形】	
で、その家族がそろったときに、	【再生】	
そこで、その、…お医者さんの病院側とその親族の方で	【再生】	+
機械の、とめますっていう話をされたんですね？	【変形】	+
で、まあ、そのあとしばらくして、	【変形】	
畑中さんとそのご親族の方が、おじいさん、が亡くなるのを見届けるっていう…ことで		
すか？	【変形】	+

計…【変形】17ユニット 【再生】5ユニット 〈揺らぎ指標〉14ユニット

く語り手に返されていった。Bの無意識的混乱や言語的確認は、語りそのものを受けとめ損ねたBが目の前に語り手との関係の中で示そうとした誠意やフォローとして捉えられるのではないだろうか。

(3) 事例C——内側から語り直す聴き手

a) 聴き手Cの「聴き方」について Cは23歳の女性であり、今回の調査を通じて語り直しの際の【変形】が最も顕著にみられた聴き手である。Cの語り口は非常に生き生きとしており、終始、熱く真剣な態度が貫かれていた。【変形】ユニットの平均は約40%であり、半分以上の聴き手は【変形】ユニットが半数未満であるにもかかわらず、Cの語り直しテキストは量が突出して多いのに加え、約70%が【変形】を受けていた。

Cは語り直し後の感想で、「いきなり私の話をしまっすっていわれたんで、すごく興味をもってききました。」と語っているが、語りに対するCの強い関心は語り直しテキストの各所に表れている。たとえば、基本テキストの「高校くらいまでは電車で会うと話したりしていました」という箇所は「高校に入るぐらいまで、畑中さんが高校に入るぐらいまでだからすごい長い間だと思うんですけど、ずっと仲良くしてて、電車で会ったりとかしたらいろんな話したりとかできて、そうですね、最初そんな感じだったのに実はすごい気があって仲良くできて」と語り直されており、Cによって元の話が広がり、膨らんでいることがわかる。また、基本テキストでは交換日記をするまでの事実が叙述されるのみなのに対し、Cは「そうだったのかー！って、仲良く、お姉さんって感じで、うん、仲良くできるようになって」と、感情をこめて語っている。「目の大きな、ちょっと印象的なお姉さん」についても「結構きれいな、うん、きりっとしてたお姉さんが…えっと、そう！目が特徴的に大きくてきりっとしてる人なんですけど」と、まるでCが見たことを話しているかのような語り口で語り直している。このようにCは、語り直すことを通じて語りをその場で身をもって再現している。あたかもC自身の体験であるかのように生き生きと語り直されることによって、聴き手—語り手という元々の役割がいつのまにか反転し、

「語り直す」というよりむしろ、Cが自分のことを「語る」場のようになっているのである。鏡の役割に徹して自らは語りに入り込まないAや、語り手—聴き手の水平関係に専ら意識が向けられたBに比べ、Cの「聴き方」は、語りに対する関与の深さが際立っている。Cは、まず聴き手自らが語りの内側に飛び込み、そこに含まれ、没入するという形で語りを引き受けていると考えられるのである。

b) 語り手の体験からの考察 語り手にとって、今回の調査を通じ、話を「聴いてもらった」と最も強く感じられた聴き手がCであった。語り量が最も大きく変形されてしまった事例であるにもかかわらず、語り手がこのような印象をもったことは、「聴く」関与において、客観的に正しく情報を受けとることだけが重要なのではないことを示唆しているだろう。

Cは調査終了後、語り直す際に目の前の語り手についてはほとんど考えなかったと述べた。「やっぱりその話を再現したいなああっていうのがあって、登場人物の畑中さんについてはすうごい考えたんですけど、なんかもうそれに一生懸命だったんですけど。」「私が今話してるその畑中さんっていうのはほんとに全然考えられなかったんですよ。こう話したらこう思われるとかも全然考えられなくて。とにかくその小さい畑中さんっていうのを思い浮かべて、それを追ってる感じでした。」「最初に畑中さんの話をきいてるときに、ききながらどんどん頭の中で情景が出てきてそれを追っていった。(語り直しの際には)頭の中で追ったことを忠実に出そうって」。Cのこの言葉には、Bが語り直しの際に目の前の語り手に意識を向けていたのとは対照的に、全力で語りに関与しようとする姿勢が表れている。Cはまず、自らの身をもって語りを体験し、その自らの体験に忠実にあろうとしている。Cは、目の前の語り手が見えなくなるほど語りに入り込んでおり、そのために語り直す際の正確性は失われてしまっている。しかし、これほどまでに「一生懸命」で深い関与が語り手に「聴いてもらった」という感覚を呼び起こし、正確な情報伝達とは異なるレベルで語り手を動かしたと考えられるのである。

ただし、Cの「聴き方」は元のを大きく変形しているために、危険を伴うものでもある。岩宮

表10 事例C 語り直しテキスト①

	【再生】	【変形】	(揺らぎ指標)
と、畑中さんが、小さくて、小学校三年生ぐらいのときに、	【変形】		
えっと、塾、みたいなどころに通うことになりました。	【再生】		
えっと、その塾っていうのが、結構通うのが最初好きで、	【変形】		
その理由っていうのが、えーと、その塾っていうのがスーパーの屋上っていうちょっと珍しいところにあつたんですけど、	【変形】		+
入り口っていうのが、普段スーパーに来る人たちは入れなくて、	【変形】		
普通のスーパーの入り口のちょうど隣にあつて、	【変形】		
普通の人たちはこちにししか入れなくて	【変形】		
こちに入ることができるっていうのがすごいうれしくて、	【変形】		
その塾に行くのを楽しんでました。	【変形】		
で、あるとき行ったら、あー、あ、その塾は、色んな人が、自分の進度に合わせてやるような	【再生】		+
結構自由な塾だったんですけど、	【変形】		
だいぶ上のお姉さんで、	【変形】		
結構きれいな、うん、きりっとしたお姉さんが	【変形】		
えっと、そう！目が特徴的に大きくて、きりっとしてる人なんですけど、	【変形】		+
その人がすごくじっと見てるように、	【再生】		
途中から気づくようになって…	【変形】		+
で、最初はやっぱり、うん、にらまれてるようになって	【再生】		+
…びっくりもしたし、	【変形】		+
ちょっと年上の人だったし、	【変形】		
やっぱり怖いなって思って、	【変形】		
で、その日は帰った…。	【変形】		+
それから通ってるとその人はその特徴的な大きな目ですごい見て、	【変形】		
で、その人は年上だし、	【変形】		
あ、畑中さん自身は、入ったのも遅いし、	【再生】		
自分より進度の遅い…ところの授業、をやってたんですけど、	【再生】		+
そのお姉さんはだいぶ進んで、…っていうこともあって、	【再生】		+
ああ、にらまれてるなあ、つていうか嫌われてるんだなあ、というか。	【変形】		+
理由はすごいわからなくて戸惑うんですけど、	【変形】		
でもやっぱり敵意っていうのを感じて、ライ、ライバル心みたいな敵意みたいなを持つようになっていって、	【変形】		+
そんな感じで何週間か、塾に通い続けました。	【変形】		
で、ある日、そのお姉さんが、消しゴムを畑中さんのすぐ近くに落として、	【変形】		
で…畑中さんはやっぱりちょっと戸惑うんですけど、	【変形】		+
あ…消しゴムをひらってあげて、	【再生】		+
そしたら、ルーブリーフに、	【変形】		
ずっと友達になりたかったことが書いてあって、	【再生】		
そうだったのかー！って	【変形】		
仲良く、お姉さんって感じで、ううん、仲良くできるようになって、	【変形】		+
それから交換日記を始めました。	【再生】		
で、しばらくして	【変形】		
あ！、交換日記がいつまで続いたかわからないんですけど、	【再生】		+
高校に入るぐらいまで、	【変形】		
畑中さんが高校に入るぐらいまでだからすごい長い間だと思うんですけど、ずっと仲良くして、	【変形】		
電車で会ったりとかしたら色んな話したりとかできて、	【変形】		
で、そうですね。最初そんな感じだったのに実はすごい気があって仲良くできて、	【変形】		
でもやっぱり時がたって会えなくなってしまつて	【変形】		
今ではもう連絡とかもつかないんですけど、	【変形】		
なんかときどき、その目の大きなお姉さんがモデルになりたいっていったことを思い出して	【再生】		
で、今はどうしてるのかなあって思うことがときどきあるそうです。	【変形】		

計…【変形】36ユニット 【再生】12ユニット 〈揺らぎ指標〉15ユニット

表 11 事例C 語り直しテキスト②

	【再生】	【変形】	(揺らぎ指標)
畑中さんには、別のところに住んでるおじいちゃんとおばあちゃんがいて、	【変形】		
で、おじいちゃんっていうのがおばあちゃんより 10 歳ぐらい年上だったんで、	【再生】		
結構離れて、	【変形】		
やっぱり大正生まれのおじいちゃん、	【再生】		
男らしい男の人って感じで、	【変形】		
やっぱり家事とかもできないし、	【再生】		
そんなのは女の人の方がやることだーって感じで、できなくて	【変形】		
おばあちゃんに対して高圧的な態度…って畑中さんには思えるような感じだったんで		【変形】	
ですけど、		【再生】	
でもあるとき、おばあさんが先に亡くなってしまって、	【再生】		
おじいちゃんとしては…うん、やっぱり年も自分の方が上だったし、	【再生】		+
やっぱりおばあちゃんっていうのは、自分の後ろにいつもいる存在だったんで、	【変形】		
そのおばあちゃん先に亡くなってしまったっていう感じで	【変形】		
すごいショックを受けたみたいで	【再生】		
…で、それまでは威勢良く色々しゃべったりしてたおじいちゃんが、	【変形】		+
すごい元気がなくなって、	【変形】		
自分も早く死にたいとかそんなふうになるようになってしまって、	【再生】		
で、やっぱり子どもの頃の畑中さんとしてはそういうふう	【変形】		
そういうふうなおじいちゃん見てたらやっぱり楽しく過ごせないしってこともあつ		【変形】	
て、		【再生】	
だんだん、おじいちゃんおばあちゃんの家に行くことも少なくなってしまうと、	【変形】		
で、大学に入って、畑中さんが。しばらくしたら、	【変形】		
うん…急に、おじいちゃんが入院してしまって、	【変形】		+
で、それで、…病院にお見舞いにもたまにいたりするんですけど、	【変形】		+
もうどんどん弱って行って、	【変形】		
小さくなってしまっていて、小さく…	【再生】		+
なんかほんとに小さくなると思うんですよ。死にそうなききって。	【変形】		
実際にも体重がすごい減ると思うし、	【変形】		
それに、やっぱり昔のおじいちゃんとかだいぶ違うっていうことにやっぱりショックを		【変形】	
受けて、		【再生】	
もう長くないってことはもうそのときわかって、	【変形】		
いつかそういうときが来るんだろうなあっていう感じで	【変形】		
畑中さんは一人暮らしをして暮らしてたんですけど、	【変形】		
あるとき、お母さんからのメールで、うん、メールで、今日はどうしてるの？って		【再生】	+
いうメールが来たんですけど、		【再生】	
やっぱり、いつものメールと違うっていう感じはなんとなくわかって	【再生】		
やっぱり、いつかそういうメールがくるんじゃないかっていうのは元々あったんで、	【変形】		
うん、なんか、なんか違うなって思って、電話をかけ直すんですけど、	【変形】		+
時間があつたら、これないかって行って	【再生】		
で、病院に行くど、	【再生】		
みんなが待ってて畑中さんが一番最後だったんで、	【変形】		
おじさん？おじさんが、親戚みんな集まっていたんで、	【変形】		+
おじさんが、看護婦さんに言って、	【再生】		
で、酸素ボンベ、みたいので、じゃないと、もう生きられないみたいな状態にまで、		【変形】	+
おじいちゃん悪くなっていたんですけど、		【再生】	
そのおじいちゃん酸素ボンベはずすってことになって、はずしました。	【変形】		
そうすると、やっぱり当然自分で息できるだけになっちゃうんで、	【変形】		
今すぐじゃなくても、いつか死ぬってことはみんなわかって、	【変形】		
みんなずっと夜とか待ってるんですけど、	【変形】		
結構、そのときっていうのはうん、早く来てしまって、	【再生】		
心臓、を表す線っていうのがあるとき、まっすぐになって、	【変形】		
ああ、そっかー、ついに死んじゃったんだなあっていうふうに思いました。	【変形】		
計…【変形】 31 ユニット 【再生】 16 ユニット (揺らぎ指標) 9 ユニット			

(2004)が、相手の物語に含まれることは“自分の「こちら側」での存在が消失するほどの重みをもつ”と述べているように、語られた言葉を変えることは、語られた元々の世界を破壊してしまうことでもある。たとえば、Cの「高圧的な態度」「威勢良く色々しゃべってたおじいちゃん」などという祖父の描写は基本テキストにはなかったものであり、語り手の語ったことを超えた表現とも言える。Cの事例によって、「変形する」ことが、新しいものを生み出し、新たな関係を開く可能性をもたらすことが示されたが、語り手が語らなかつたことを聞き手が語ることは、元の話を書き換え、違うものにしてしまう破壊的な行為になりうるということを忘れてはならないだろう。今回の調査で語り手が「聴いてもらった」と感じた体験は、Cの「聴き方」がもつポジティブな力とネガティブな力の微妙なバランスの上に生まれたものと考えられるのである。

Cの示した「聴き方」は、Cが存在を投じて語りの内側に入り込んだために、元のものへの破壊というリスクを伴いながらも、語り手に強い感動を呼び起こした。語り手が新たな視点から語り直され、動き出すことで、語り手は元の語りの世界から一旦自由になり、自らの語りとの新たな関係を築く可能性を得るのではなかろうか。

まとめ

3事例を通して、それぞれの聴き手がどのように語りを受けとめているのかについて、その可能性と危険性の両面から考察してきた。ここにあげた3名の「聴き方」は評価されるべきものではなく、これらから「聴く」関与がもたらす働きの本質を学びとることが重要であろう。

Aは、鏡のような役割に徹し、語りをそのままなぞるという「聴き方」を示し、語り手に語りをうつし「返す」ことで、語り手が自らの語りともう一度向き合う可能性を開いていた。その反面、語り手に対する聴き手の直接的関与は少なく、語り手がうつし返された語りを新たなものとして受けとめ直せなければ、単な

る表層的な言葉の行き来にとどまってしまう可能性もある。このようにAの「聴き方」は、言葉を忠実にうつし返すことの可能性と危険性を示していると考えられる。

Bは、語りを聴くことで自身が心理的揺らぎを受けるとともに、語りそのものよりも目の前にいる語り手に意識を向けるという「聴き方」を示した。語り手に返される最も大きな動きは聴き手の揺らぎであり、語りは聴き手に差し向けられたまま受けとめ先を失い、聴き手にも語り手にもそれ以上の関与を受けることがない。こうした「聴き方」は、語りそのものの深まりにはつながりにくいですが、その場の聴き手-語り手関係に対して意識が向けられた関与のあり方と考えられた。

Cの「聴き方」は、聴き手が身をもって語りを内側から体験し、生き直すようなものであった。Cの「聴き方」が上記2事例と決定的に異なるのは、聴き手の関与が徹底的に語りそのものに対して行われていることである。聴き手が自らの身を投じて語りに深く没入することで、元の語りは大きく変形され、新しい語りとして再びその場に生みだされる。聴き手の捨て身で真摯な関わりによって、聴き手が徹頭徹尾、語りへのみ関心を向けているにもかかわらず、語り手も自然に巻き込まれていくような大きな動きを生じさせた。こうした聴き手の積極的な関与は、自ら身を投じるCの潔さと誠心に支えられ、元の語りが壊される危険を越えて、語り手に「聴いてもらった」と感じさせたのであろう。Cの「聴き方」は、語り手に対する聴き手の積極的で深い関与がもつ力の大きさと、「聴く」という関与が正確な情報伝達のレベルを越えて働く様相を示していると考えられる。

今後の課題

本研究では、聴き手がひとつの話を語り直す場面から3事例をとりあげ、「聴き方」のもつ可能性と危険性について考察した。限定された3つの事例からではあったが、事例を深めて考察することによって「聴く」という関与のもつエッセンスのある側面を描き出すことができた。今回は一場面のみを検討であったた

めに、「聴き方」を便宜的に聴き手のもつ固定的なスタイルのように捉えたが、実際の心理療法は関係性という基盤の上になつ、より複雑でダイナミックなプロセスである。プロセスの中で聴き手のもつ「聴き方」のスタイルが立ちゆかなくなったり、変化したりするところに臨床的なポイントが生じてくるものと思われる。たとえば、本研究で得られたデータにも2つの質の異なる話を続けて聴くことによって生じる影響がみられた。臨床面接は、まとまったエピソードが語られるばかりではなく、物語にならない話や他愛もない雑談、深刻な悩みまでさまざまな話が入り混じりながら展開されていくものである。感情的負荷の強さによる聴き方への影響や、より長い時間経過の中で聴き方がどのように変化するかなどについての検討は今後の課題として残された。このような視点を加え、本研究で得られた知見と、臨床実践で起こりうる現象とがどのようなつながりをもつのかについて、引き続き検討を重ねたい。

引用文献

- 馬場禮子. (1995). *ロールシャッハ法と精神分析——継起分析入門*. 東京：岩崎学術出版社.
- バートレット, F. C. (1983). *想起の心理学——実験的社会的心理学における一研究* (宇津木保・辻正三, 訳). 東京：誠信書房. (Bartlett, F. C. (1932). *Remembering: A study in experimental and social psychology*. Cambridge: Cambridge University Press.)
- フロイト, S. (1970). *日常生活の精神病理学*. (池見西次郎・高橋義孝, 訳). 井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎 (編), *フロイト著作集 4* (pp.5-236). 東京：人文書院. (Freud, S. (1901). *Gesammelte werke, XIV*. London: Imago Publishing.)
- Goodwin, C. (1980). Restarts, pauses, and the achievement of a state of mutual gaze at turn-beginning. *Sociological Inquiry, 50*(3-4), 272-302.
- Goodwin, C. (1981). *Conversational organization: Interaction between speakers and hearers*. New York: Academic Press.
- Goodwin, C. (2009). Embodied hearers and speakers constructing talk and action in interaction. *認知科学, 16*(1), 51-64.
- 岩宮恵子. (2004). *思春期をめぐる冒険——心理療法と村上春樹の世界*. 東京：日本評論社.
- ユング, C. G.・リックリン, F. (1993). 正常者の連想についての実験的研究. (高尾浩幸, 訳). ユング, C. G. (著), *診断学的連想研究* (pp.9-206). 京都：人文書院. (Jung, C. G., & Riklin, F. (1904). *Expérimentelle Untersuchungen unber Assoziationen Gesunder. Journal für Psychologie und Neurologie, 3*)
- ユング, C. G. (1993). 連想検査における再生の障害について. (高尾浩幸, 訳). *診断学的連想研究* (pp.407-424). 京都：人文書院. (Jung, C. G. (1907). *Über die reproduktionen storungen beim assoziationsexperiment. Journal für Psychologie und Neurologie, 4*)
- 河合隼雄. (1992). *心理療法序説*. 東京：岩波書店.
- Madill, A., & Barkham, M. (1997). Discourse analysis of a theme in one successful case of brief psychodynamic-interpersonal psychotherapy. *Journal of Counseling Psychology, 44*(2), 232-244.
- 森岡正芳. (2002). *物語としての面接——ミメシスと自己の変容*. 東京：新曜社.
- 森岡正芳. (2005). *うつし 臨床の詩学*. 東京：みすず書房.
- 邑本俊亮. (1992). 要約文章の多様性——要約産出方略と要約文章の良さについての検討. *教育心理学研究, 40*, 213-223.
- Nagaoka, C., & Komori, M. (2008). Body Movement Synchrony in Psychotherapeutic Counseling: A Study the Video-Based Quantification Method. *IEICE Transactions on Information and Systems, E91-D*(6), 1634-1640.
- 長岡千賀・小森政嗣. (2009). 心理面接におけるカウンセラーの応答——話者交替時のカウンセラーの発話冒頭を指標とした事例研究. *認知科学, 16*(1), 24-38.
- 岡昌之. (2004). カウンセラーに求められる「聞く力」. *言語, 33*(3), 40-45.
- ロジャーズ, C. (2001). サイコセラピー技術の改善における電気録音面接の利用. (伊東博・村山正治, 訳). *カーシェンバウム, H.・ヘンダーソン, V. L. (編), ロジャーズ選集 (上) ——カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選 33 論文* (pp.256-264). 東京：誠信書房. (Rogers, C. (1989). Kirschenbaum, H., & Henderson, V. L. (Eds.), *The Carl Rogers reader*. New York: Sterling Lord Literistic Inc.)
- ロールシャッハ, H. (1976). *精神診断学——知覚診断的実験の方法と結果*. (片口安史, 訳). 東京：金子書房. (Rorschach, H. (1921). *Psychodiagnostik*. Bern: Hans Hiber.)
- 下坂幸三. (1994). 「なぞる」ということ. *精神医学, 36*(12), 1232-1233.
- ウィング, L. (1998). *自閉症スペクトル——親と専門家のためのガイドブック* (久保紘章・佐々木正美・清

水康夫, 監訳). 東京: 東京書籍. (Wing, L. (1996).
*The autistic spectrum: A guide for parents and
professionals*. London: Constable and Company.)

謝 辞

本論文は, 平成 16 年に京都大学大学院教育学研究科へ
提出した修士論文を加筆・修正したものです。調査にご
協力いただいた皆様, また, 論文作成にあたりご指導い
ただきました桑原知子先生, 山中康裕先生に心より感謝
いたします。

(2009.4.17 受稿, 2009.10.30 受理)